

〈講演・講義・速報〉

第2回 国際情報学部公開「教育シンポジウム」

iTTLのこれまでとこれから

日時 2023年7月26日(水) 15時～17時

会場 中央大学国際情報学部 市谷田町キャンパス5階 501号教室

プロデューサー	国際情報学部教授	松野 良一
司会	国際情報学部1年生	宮崎 翔大, 川嶋 佳恋
プレゼンテーション	国際情報学部1年生	瀧澤菜々花
登壇者(五十音順)	国際情報学部教授	飯尾 淳
	国際情報学部教授	岡嶋 裕史
	国際情報学部教授・学部長	平野 晋
	国際情報学部教授	保坂 俊司

司会 ただ今より、「国際情報学部 第2回シンポジウム iTTLのこれまでとこれから」を開催いたします。本日、司会を務めますのは、2023年度基礎演習松野ゼミの宮崎翔大と川嶋佳恋です。よろしくお願ひいたします。それから途中でプレゼンテーションをはさみますが、そちらを担当いたしますのは、瀧澤菜々花です。3人とも1年生です。よろしくお願ひいたします。

最初に、今回のシンポジウムの企画主旨についてプロデューサーの松野先生お願ひいたします。

松野 では、最初に、国際情報学部 (iTTL) がどのような経緯で生まれたのかということについて、簡単に説明しておきます。最初のきっかけは、中央大学の全学の委員会で、「IT政策学部」を作るという案が出たことでした。その案は、総合政策学部の内容とかぶるため、同学部で引き取り検討を開始しました。そして、総合政策学部を、「政策系学部」「国際文化系学部」「情報メディア系学部」(名称は全て仮)の3学部で構成される『総合政策学術院』に改組してはどうかという構想を立ち上げました。『学術院』というものは、早稲田大学に先行事例がありますね。しかし、情報メディア系学部という名称と内容に対して、文学部から強い反対が出て同学部の教授会で否決されてしまいました。これが様々な影響を及ぼし、最終的に『総合政策学術院』構想は断念せざるをえませんでした。

しかし、社会はどんどんIT化が進んでおり、何とか中央大学にIT系の学部を作るべきではないかという意見も強くでておりました。他学部の内容とバッティングしないようにするには、どうしたらよいのだろうかと散々悩みました。そこに、平野晋先生が、重要なアイデアを出されました。「情報、ITだけでは、他の大学にもあるので、中大の強みである法律を入れたらどうだろうか。急速に進化する情報通信技術に対して、法整備が追いつかず様々な問題が生じている。情報分野に法律・政策の分野を組み合わせるとはどうだろうか、という案でした。これによって、情報+法律、IT & Law, iTTL, 現在の国際情報学部の構想へと繋がっていったわけです。さらに、当時都心に新しい学部を作ってはいけないという23区規制もありま

したが、それも奇跡的にクリアし、さらにこの市谷田町キャンパスを教場として使えることになりました。その結果、無事に2019年に国際情報学部がスタートし、1期生が入学いたしました。2023年に完成年度を迎えることができました。そこで、今回のシンポジウム「iTLのこれまでとこれから」を開催することになった次第でございます。

司会 ありがとうございます。我々も知らなかったんですけど、平野先生がアイデアを出されたんですね。では、さらに詳しくiTL誕生の秘話というのを、平野先生お願いいたします。

平野先生 ご紹介に与りました国際情報学部長の平野晋でございます。これからの私の話は、『国際情報学研究』に載っかる前にいろいろな検閲を入れるつもりなので(笑)、全部しゃべります。ここで、初めに言います。もう、ここからは「オフ・ザ・レコード」(“off the record”)な内容も含まれます。まず、私、3つの言葉を使いたい。

一つ目の言葉は「孫子曰く、兵は拙速を尊ぶ」です。この学部、新学部を創って欲しい、と私が中大の某トップから依頼をされて、第1回「ICT・メディア系学部設立検討委員会」を2017年12月4日に開催しました。他方、国際情報学部の開校が2019年4月1日なので、僅か1年4ヶ月でこの学部を創ったことになります。これ、奇跡でございます。普通、学部を創るためには4年間ぐらいじっくり時間を掛けるので、これすなわち僅か1年4ヶ月で新学部を設立させた奇跡を称して、我々は「兵は拙速を尊ぶ」と言っています。その極意は何かと言うと、作戦の詳細づくりに時間を掛け過ぎる結果として、勝機を逸したら元も子もない、重箱の隅を議論するよりも時宜に合った作戦の実行こそが重要である、という意味です。今、松野先生からご紹介もありましたように、当時、東京都23区内の大学生の数を増やしてはならないという23区規制という法律が施行されるところでございまして23区内に新しい学部を創ろうとすれば、学生数が増えてしまうわけですから、原則として新学部を設立できません。そのような23区規制の経過措置として新学部の設立が許されるのは事実上2019年4月開校のみ許される、とかですね、様々な条件をクリアしないと新学部は設立できなかった。そもそも僅か1年4ヶ月で設立するためには「認可」という難しい文科省の手続きだと、なかなか成功率が低い。そこで我々は、「認可」ではなく「届出」という、成功率の高い手続きで設立する戦術をとりました。ちなみに「届出」という手続きでは、すでに中央大学が認可されている分野、すなわち「法学」及び「理工学」、この二つで申請すれば届出という簡易な手続きでいける、この一点しかないということで届出方式を使って設立しました。「兵は拙速を尊ぶ」という戦術をとることで、お陰様で上手くいきました。

もう一つ、「石橋を叩いて割る」という言葉。中央大学は、四半世紀、約25年、新学部を一つも創れませんでした。その間に早慶MARCHの皆さんは、素晴らしい新学部を創って良い学生さんをどんどん獲っていった。その中で、今回は四半世紀ぶりに、新学部を創れた。しかし何故今まで創れなかったのか。それは、中央大学の伝統である「石橋を叩いて割る」ですね。すごく慎重なので、叩いているうちに割れちゃうんです(笑)。そうすると好機を失ってしまう。ですから、「兵は拙速を尊ぶ」というのは、全く中央大学の文化に反する[因習破りな]作戦です。拙速なんて、本来絶対に許されない。この学部を創るためには、全部の学部の教授会の承認が必要でしたが、拙速ではないかという意見もあったようです。当時の幹部から、平野先生、そういう声が聞こえているのだけれど、1年延ばせませんかねと言われたとき、僕は突っぱねました。最後までやらせてくれ、行けるところまで行かせてくれ、と、新学部を23区内に創るためにはこの一点、2019年4月開校しかないのだから、と言って設立に邁進しました。結果的には上手く設立できましたね。

それからもう一つ、最後に3つ目の言葉。「文科省より厳しい学内審査」という言葉が中央大学にあります。新学部設立の提案について文科省を通すよりも学内の全ての教授会を通す方が難しいんですね(笑)。それは松野先生からもお話がちょっとありましたが、例えば、このへん特にオフレコですが、...[オフレコなので削除してあります;-)]... 以上が、「文科省より厳しい学内審査」を通して新学部を設立することが非常に難しかったという話でした。

いろいろな奇跡が重なってお陰様で皆様のご協力をいただけて、[国際情報学部は設立]できました。例えば、これもオフレコですが、ある学部から、...[オフレコなので削除してあります;-)]... これ全部オフレコでお願いいたします。ということで、言いたいこと全部言いましたので、まだまだ言いたいことはありますけれど、一応、あ、5分でしょ? 10分? まだよいのですか、では、各論に行きましょう。

いろいろな奇跡の一つが、まず、都心に学部を創る時に、この市ヶ谷田町のビルが空いていたんですね。空いているという言葉はちょっと語弊があります。正確に表現すれば、教育機関ではなかった。法科大学院の修了生の方々が司法試験の勉強をここでやられていたんですね。ですけど、それは免税対象となる「教育機関」ではないので固定資産税を徴収されることになって非常に大変だから、「中央大学」としては是非ここに「教育機関」に該当する新学部を創って欲しいという要請が先ずありました。加えて、中長期計画「CHUO VISION 2025」というのが実はありまして、その計画の中で「ICT・メディア系学部(仮称)」を創ることになっていたのです。それをまあ「中央大学」としては是非とも創ってほしいと某トップから頼まれました。私は転職して中大の教授に成る前はもともと企業の法務部門のサラリーマンでしたので、社長から頼まれて嫌と言うのは普通サラリーマンではあり得ませんでした。が、しかしどうも大学教授という職では嫌と言えるらしいんですが(笑)。とにかく私は、サラリーマン時代にしみ込んだ素直さゆえなのかもしれませんがwww、某トップから新学部創設の依頼を受けた際に嫌と言わ(え)なかったんですね。実は、慶応SFCの総合政策学部を含む「八大学政策系学部長懇談会」でしたっけ?(元総合政策学部長の松野先生に尋ねながら)そういう懇談会内のもっぱらの噂では、新しい学部創設を引き受けると過労で死ぬと言われていたんですが、私は思わず引き受けてしましまして、でも、お陰様でまだびんびんしていますけれども(笑)。このビルが使えるよという話が良い条件であったということですね。

というような話があり、2017年12月4日に第1回の「設立検討委員会」が開かれ、それでどういう学部にしようかということで松野先生のお話にあったように、他の学部からも代表者が委員として委員会に参加しています。飯尾先生は文学部代表で実は参加しておられて、岡嶋先生も保坂先生も総合政策学部代表で参加しておられて、いろいろな学部の代表者の方々と相談しました。その中で、「法律」と「IT」を絡めていく新学部が、中央大学としてやはり強みを活かせるのではないかなという私のアイデアに賛同をもらったので、「iTL = IT + Law」という言葉もみんなで考えて国際情報学部の設立をやったんですね。尤も学部名称に実は法律の「法」の字は入っていません。さすがにそこまで要求すると[新学部の構想案が]某学部教授会を通らないかなと思って、それがちょっと敗因なんですね。学生さんが入学してから、え、法律を勉強するって知りませんでしたという方がいて、非常にこれが我々ちょっと痛い部分で、学部名しか受験生は気に留めなかったりするのです。そこは是非とも皆さんに協力いただきたいのは「iTL」という言葉を是非ともどんどん宣伝していただいて、湘南藤沢の方にある3文字のアルファベットに負けなような「iTL」、iTL音頭ってやりたいぐらいです、私は(笑)。ここはITと法律を勉強するんだということを是非とも皆さん宣伝をしていただきたいなと思います。

まだちょっとしゃべれるかな、それならば苦労話を一つ。これは、第1回入試を2019年2月に、開校前に実施したときの話です。私と須藤先生って、実は国の代表でOECD(経済協力開発機構)のAIルールを作る「AI専門家会合」のメンバーで、その会合をドバイでやるって話だったんですよ、2月に、ドバイ首

長国はお金持ってますから、ドバイの OECD「AI 専門家会合」の委員が他国の委員の皆さんをドバイにご招待しますという美味しいお話だったんです。あれですよ、トム・クルーズの映画「ミッション・インポッシブル」のゴースト・プロトコール (Paramount Pictures, 2011 年) に登場する超高層ホテルにうわっ行けると妄想を抱いていたら、開設準備室の事務長との相談の中でそれはまずいです、入試の日にやっぱり何かあった時に、山は動いちゃいけない、すなわち準備室長の平野先生は日本に居ないと困ると言われ、泣く泣くドバイ出張は断念して、まだ、ドバイには行ったことがないというのが苦労話でございます。

もうそろそろ巻きが入ってますけど。お陰様で 2019 年の 4 月 1 日にふたを開けて見れば、すごく優秀な皆さんを一期生として迎えることができ、皆さんご承知のように、先日卒業して、非常に就活の方も立派な成果を上げてくれました。実は先日ある受験産業の人々と意見交換会をした際の準備として、こんなところに一期生の皆さんは就職していますよという冊子を、学部事務室の方で立派な冊子を作ってもらって、それを受験産業の人にあげたら、これは素晴らしい、これを見たら高校はもうみんな iTL に行かせるがりますよという素晴らしい言葉をいただいたので、私としては、1 期生は素晴らしい成果を出してくれたなと、で、これに続いて 2 期生以降の皆さんも優秀な成果を上げていただきたいと切に願い、時間がもうそろそろですので、私の苦労話は以上といたします。ご清聴ありがとうございました。

司会 ありがとうございます。それでは、岡嶋先生お願いいたします。

岡嶋 国際情報の教員の岡嶋と申します。このような素晴らしいシンポジウムで発言の機会をいただき、どうもありがとうございます。最初の話は、iTL ができるまでということで、お題をいただきました。楽しかったですね。平野先生は責任者ですから本当にご苦労が多かったと思いますが、学部を作るところに参加させていただけるのってなかなかない経験だと思うんです。だから個人的には楽しかったです。僕は、家庭の事情で、高校に行っていないんですね、そんな重たい話でなくてちょっと家を手伝う必要があったんですけれど、もともと学校通ったりするの好きじゃなかったんで、たぶん人生で最高の時期でした。学校行かずに家を手伝って、空いた時間はずーっとゲームしていたので、素晴らしい 5 年間だったなと思います。中学の時に大検ほとんどとっちゃってたんで、もう遊ぶぞって決めて、3 年のつもりだったんですが、あんまり居心地が良いので 5 年遊んでしまいました。中卒で 5 年遊んだ人間を採ってくれるような大学は、ないですよ。なのでその当時、中央大学で初めて 1 期生を募集していた総合政策学部が、あまりその辺を気にせず拾ってくれて、ありがたいことだなと思いました。僕は学生として 1 期生で入学するっていう経験もさせていただいて、今回、国際情報で、教員で皆さんを迎え入れる形で 1 期生にかかわらせていただくという、すごく貴重な経験を二度させていただいたというふうに思っています。だから今振り返ってみると、すごく楽しかったなと、人生でそんなにできる経験ではないし、というのが一番の感想です。

学部を作る時に、すごく気をつけたというか、思ったのは、さっき平野学部長もお話しくださったように、やっぱり中央大学って、すごく硬い大学だと思うんですよ。ルールがすごくしっかりしている。ゆえになんかこうはみ出したりすることができない。あの、戦後のどさくさっていうんですかね、作る時にどさくさに紛れていろんなことをしないと、なかなか新しい試みができないと思ったので、なるべく冒険しようって思ったんです。で、どんな部分で冒険するのがいいのかなと。自分の得意分野とも重ね合わせてみて、いろいろ考えてみたんですけども、なるべく楽しそうな授業を作り込んでいくのがいいだろう、楽しいという語弊あるんですけど、学生さんが役に立ったな、満足したなって思えるようなやつ。どうやったら納得感、満足感を覚えてもらえるのかいろいろ考えたのですが、やっぱり社会に出た時に役に

立つやつがいいのだらうと思いました。もちろんプロパーの教員だって、社会に出た時に役に立つような授業って皆さん心がけてやっていらっしゃると思うんです。でも一方で、大学ですっとやってきた人のお話がそんなに役に立つのかって、学生さんが疑っていらっしゃるのもすごくよくわかります。僕は両方経験しているんです。大学の教員も経験しているし、民間で働いていたこともあるし、だから大学の授業が、社会ですごく役に立つなというのは身にしみてわかっているんですけども、学生さんにとっては、それがなかなか実感を伴って理解しづらいところだと思ったんですよね。なので世界に名だたるような、いわゆるエクセレントカンパニーの従業員の方をお招きして授業を持っていただく、これがたくさんできるように頑張りました。LINEですとか、Production I.G, スタジオジブリ、スクウェアエニックス、DeNA、アクセントチュア、Microsoft、講談社、楽天、それから日経さんとか、いろんなところから先生をお招きして、それを実現させることができた、それは良かったんじゃないかなと思っています。

ただ、社会人目線と言うと、ほらすごい会社でしょ、この人たちに直接教わる機会なんて中々ないから楽しんでねっていうつもりで揃えたんですけど、学生さんにとっては馴染みのない会社であったりとか、今、勉強しようとしているところと乖離があって、あんまり納得できなかったなという授業もあったんじゃないかと思います。それから会社さんにしてみても、俺たち世界の第一線の知見で授業してるんだけど、話してみたら意外と学生さんが興味持っていないとか。あと、なかなか人が集まらなくて、コロナのせいもあるんですけど、10人くらいしか聞いてくれない授業もありました。すごく単価の高い人たちを先生で出しているのに、その位だったら止めちゃおうという会社さんも出てきて、ちょっと今寂しい状況になってしまっているんです。少しずつやめる会社が多くなってしまっている。なので、せっかくコロナもあけて、学生さんも対面の授業に参加していただけるようになり、会社にとっても人を出す意味というのがまた盛り上がってきたところですので、完成年度を迎えてまた発展していけるように、これからも頑張っていきたいと思います。ありがとうございました。

司会 ありがとうございます。それでは続きまして保坂先生お願いします。

保坂 国際情報学部の保坂です。私はですね、この国際情報学部で、いわゆる教養といいたいでしょうか、そういうものをどういうふうに位置づけるかということを一応担当しております。特に問題になったのは、国際というのがですね、国際がインターナショナルということだったんですけど、普通はね、インター・ナショナルというのは地球を国々の集まりとするのがこのインター・ナショナルの意味だと思います。しかし僕はですね、それは今までの感覚、いうなれば、足で歩いた時代の感覚だと思う。しかし情報化というのは、まさにグローバルで、地球全体を情報の網で覆うわけですね。だから日本にしようがヨーロッパにしようが全然関係ないんです。場所はね。だから、「グローバル情報学科」にしたらなんて思ったんですけど、グローバルを訳すと、やっぱり、今、国際とかになっちゃっているんですよね。僕は「全球」というのも良いと思ったんですけども、そんな言葉は一般的でないということになって、文部省通らないと困るので、一応、国際に。ただ、今ちょっと混乱があるんですよ。飛行機に乗って国をまたぐというレベルの国際が、皆さんの国際なんです。だから「この学部で、国際って言っているけど英語くらいしかないじゃないか」更に「それも少しで、他の言葉どうしたんだ」と、不満が出ますが、今はもう地球を一つの単位で考える時代です。

そういうわけで、グローバルな国際教養という感じで位置づけました。で、このグローバルな言語って何かというと、やっぱりプログラミング言語ですね。では普通の言語と同じかと思ったのですが、要するに誰でもプログラミングさえ習得すればですね、言葉の壁を越えられると。さあ、言葉の壁を越えちゃっ

たらどうなっちゃうのかということですよ。言葉の壁はすぐ越えられるんですね。これは機械で越えればよいわけですが、内容が問題なんですよ。平野先生の法律、それから岡嶋先生とか飯尾先生の専門領域である技術ですね、そういうものをですね、簡単に言うと木でいうと枝にあたります。そして、今は枝が大きく伸びた状態です。この枝をまとめないと一つの樹木、つまり有機体にならない。そこでその有機体をどうするかといったときに、我々が一番問題にしたのは、やっぱり教養ということですね。木の幹にあたる部分といってもよいと思うのです。いろいろな技術というのは、基本は、よりよく生きる、よりよい社会を作る、そういうための基礎の知識、それをうまく拡大するのが技術です。ですから、そういう技術をうまく使えるためには、逆に言えば、優れた知識、他者をよく理解できる知識、と同時に自分をよく理解できる知識というものが重要なんです。そういうために、国際的な教養と言いますか、宗教だったり、文化だったり、もちろん言語もそうです、そういうものをコンパクトに、なにしろ無尽蔵に時間はないですから。そこで、最先端の時代の要請に合うカリキュラムをこの教養部分はめざしました。まず、最先端の技術をうまく接着する、我々の身近なものに落とし込めるような、そういうですね、観点を持って国際教養ということを構築しようとしたんですね。さっきちょっと出てきましたけれど、前の学部、総合政策というのは、まさにインターナショナルの典型で、世界各地の文化を学ぶという学部ですから現地の情報を直接理解する能力が不可欠です。しかし本学部は、目標が違います。つまり本学部は情報を得たその上で、情報を発信しないといけないんですね。発、受信の双方が出来る能力を身に着けることを目指します。その発信の、まず手段は手に入れたと、では、何を発信するんだということですよ。その発信の内容、コンテンツ、そういうものはやっぱりですね、日本人が発信するわけですから日本をよく理解し、しかし他者も理解できないといけない。この両方うまくバランスをとりながら、最先端の技術で世界にパーンと発信していく。この能力を学生に身に着けて頂くことが国際情報学部の教育の目的、我々の責務だと思っています。で、この4年間の反省はこの後ということで、以上でございます。

司会 ありがとうございます。続きまして、飯尾先生の順番ですけれど、飯尾先生は海外に出張されていますので、事前に収録したものをご覧ください。

飯尾 作る時に、やっぱりまいっちゃたなあという思い出があるのは、文学部、社会情報学との差別化といますか、すでに理工学部の情報工学科があって、文学部の社会情報学専攻があって、同じようなカリキュラム、同じような講師ですね、するわけにはいかないということで、調整するのがけっこう大変だったなあという思い出がありますね。そんな中で、特色をどんなふうに出していくかということが一番ポイントだったというふうに記憶していますが、これがどういう経緯で固まってきたのかも忘れてしまいましたけれども、やはりiTLの理念である社会の仕組みを支えるうえで、IT、情報の仕組みをまず叩きこむんだ、それから、それだけじゃなくてやっぱりサービスを社会に提供していくときに、法律による縛りですとか、そういうことがきいてきますんで、法学も教えていって、できることとやれることを学んでいくというアイデアはですね、割と早い段階で上がってきて、ちょっと優等生的な言い方をすると、これは確かに面白いなという感じでしたので、社会工学専攻とは違いますし、単純な情報工学とも違いますので、そこが共感したというか、頑張っつつくっていかないといけないなと思ったような記憶があります。

本来、ウェブのシステムとかがどわっと作れるようになって、自分のアイデアをすぐ形にできて、社会に提案できるというか、そこがだいぶ違うんじゃないかなと感じていますね。ITも、研究というか開発ですかね、開発と提供がものすごく早い段階でできるようになってきて、とりあえず試しに出してみるか、みたいなことが簡単にできるようになってきた。それはやはり何を意味するかという、いけないことも

やっちゃうリスクというのが以前よりもハードルが下がった部分、私もそんなに法律分野は明るくはないんですけども、いろいろとですね、昔から、契約書を読まされたりとかですね、一番身近なのは、やっぱり著作権関連ですかね、資料を侵害したらいけないとかですね、まあそういったところで、法律というのは、わからないながらもですね、先ほども申し上げたように、自分が作ったサービスがすぐに世の中に出せるようになったというのは、楽しいことでもあるんですけど、一方で不安もあるというか、簡単に都合の良くないことをやってしまうリスクというのも当然あるわけで、そこは昔から気にはしていました。

司会 ありがとうございます。学部開設に至るまでのお話をお伺いすることができました。私たち1年生は5期生になるのですが、学部開設してからまだ新しい方なので、先生方のご苦労なり想いがこもった国際情報学部で学びを深めることができるのはすごく幸せだなと思いました。

大混乱の中での旅立ちとなったiTLですけれど、無事に1期生が卒業をして4年を経過して、完成年度を迎えたということであります。この4年間でiTLが目指した特色、そして積み上げてきたものはどういふものだったのでしょうか。

話題2のタイトルは、「iTLの特色と4年間の実績」となっております。それでは、岡嶋先生お願いいたします。

岡嶋 はい、それでは実績のお話をさせていただきます。実績、すごい出している学部だと思うんですけどね。たぶん、ほかの先生がメインでお話をされると思うのですがけれども、これだけ国際会議で発表している学部だとか、いろんなコンテンツを作って受賞をしている学部ってなかなかないと思いますので、ほんとに在学生の皆さん、それからこれから入っていただく皆様に、誇りを持っていただける状況なのではないかと思います。

そんな中で、僕は実績を出せてないので、こんな高い場所から偉そうに何かを言える立場ではないのですが、僕もせっかくメンバーに加えていただいたので、なにか学部に貢献したいなと思って、こだわってきたことがあるんです。学生さんに、情報の分野で、何かわかりやすいお土産を持った状態で卒業していただくのが良いかな、そこはお手伝いできるんじゃないかなと思っていました。情報の分野って、これ聞いてくださっているのって在学生の皆さんが多いと思うんですが、卒業すると身に染みることがあります。ちゃんとしたプロと、口先だけの自称専門家でもプログラムも書いたことないよね、という人が混在しています。いろんな産業分野の中では比較的若い分野で、人事の評価みたいなのところもあんまり確立されていない部分があって、本当にこの人は技術を持っているのか、いや口先だけでうまいこと渡ってきちゃったのか、混然一体としています。で、中大は特にまじめな学生さんが多くて、アピールが不得意だったりするので、口だけの人に負けちゃうのはよくないと思ったので、なにか人事とかに対してアピールできる確かな形のお土産があるかと思いました。

僕がお手伝いできそうなのは、国家試験だったので、それが普及するように、それから学生さんがなるべく楽にとっていただけるように、いろいろな仕組みを作ってきたんです。たとえば、基本情報技術者、プロのエンジニアになる方にとっては登竜門になる資格なんですけれど、その受験科目が半分免除になる仕組みですとか。あと、一番難しいセキュリティの試験があるんです。安全支援士っていうやつ。その一部免除制度なんかも取り入れることができて、少し貢献できたのではないかなと思っています。ひょっとしたら、先輩などで、コンピュータの、特にプログラミングとかシステム開発みたいなのところって、実践が大事なんで、ペーパーの資格なんか取ってもあんまり意味ないよみたいにおっしゃる方がいるかもしれませんが、それが一面の真実であることは僕も民間で働いていましたんで、すごくわかっているんですけど

れども、でも、やっぱり持っていた方が良いと思うんですよね。持っていて得する部分とか、アピールできる部分ってありますので。勉強するって辛いことだと思うんです、時間的なリソース、工数的なリソース、資金的なリソースすら突っ込んで乗り越えていくものなので、せっかく勉強するならばした分は、得してほしいんですよ。そのための分かりやすい成果として、国家試験ってすごく効率のいいアピールだと考えています。ただ先輩とかはね、一度乗り越えた道ですから、あんなもんなくても俺は就職できたよとか、あんなもんなくても力の証明できたよとおっしゃる方いると思いますが、あまりそのへんのノイズには左右されずに、持っていれば、ちゃんとアピールできます。ひょっとして役に立たないのかなって思ったら努力するの怖くなっちゃうじゃないですか。でも、そんなことはないので、躊躇なく勉強に打ち込んでいただけるとよいと思います。

国家試験でいうと、導入部の資格である IT パスポートは、高校生さんとかでも取ることが推奨されているから、未取得だけと聞いたことがあるよという人がいらっしゃるかもしれません。もうちょっと難しいところで基本情報とか応用情報。ほんとにコンピューターが好きなら応用情報ぐらい、一夜漬けでも取れなきゃだめだと言われたりするかもしれませんが、なかなか取れないんですよ。僕はあの分野でもう 20 年以上参考書を書かせていただいていますけれど、ほんとに社会人、学生、いろんな方を見てきて、結構、理系の人でもころんじゃう試験なんです。だからそれに向かって努力している皆さんは是非誇りに思ってくださいですし、もし在学中に取得することができれば、確かな競争力として迷わずアピールして良いポジション、良いお仕事を勝ち取ってください。これからも、そういうお手伝いが出来たらうれしいなと思っています。状況が許せば夏期講座なども再開する予定ですから、在学生の皆さんに参加していただけると嬉しいです。これからもよろしく願いいたします。ありがとうございました。

司会 ありがとうございました。保坂先生、お願いいたします。

保坂 私のところはですね、この 4 年間で何ができたのかということなんですけども、残念ながら宗教を学ぶことに関して、皆さん勘違いしてしましてね、今、なんか変なこと教え込まれちゃうんじゃないかと思っているのかもしれませんが、学生があまり来ないんですけど、今年卒業した最初の学生はですね、わずか二人だったんですけど、IT パスポートとれよって言ったら、嫌だって言っていたんですけどね、就職が決まったら、ちゃんととって出ましたけれども、この学部ではすぐとれます、ゼミの先輩の話じゃないんですけど、地域おこしという形で地域から課題を拾い、それを iTL の技術で磨きをかけてさらに、一応教養の方なので、足で関連する各地を歩いて、それをうまく合体してですね、そして最後に、卒業制作というのを作るんですけど、その卒業制作にとどまらずに、これを Web で世界に公開させるんです。これが必須なんです。やっぱり、世界中で見ている人がいるとなると、作る側の気合も違います。AI 時代は世界に向けて誰でも発信がすぐできるという、この利点を最大限に使うということです。それを、もう学部のうちから実践させています。何しろ私がふがいないので学生にしっかりやってもらっているんですね。で、今年の結果ですと、そこに亀ヶ岡八幡というのがありますけれど、八幡様の歴史を九州までちゃんと調査に行かせました。そしてその 1300 年の歴史をずっとここまで、そしてさらに宮司さんに教えちゃったりしていますからね。宮司さんがすごく喜んでいましたけれど、こうやってですね、地域から世界へ、そして世界からまたこの地域へ戻ってくる、こういうですね、これを iTL は実践できるということですね。

私のところだけではないんです、皆さん、国際学会に発表するのって、学生で国際学会で発表するなんて我々の領域ではなかなか聞いたことがない学問領域なんですけど、それだけです、レベルが高い、と

いか新しい領域なので、誰でも参加できるということなんですよ。こんな学問領域は他にはなくて、しかもそれをうちのこの学部はですね、実践していると。まさにこれこそ国際なんです。アラビア語ができるとか、ペルシャ語ができるとかいうのも、一つの国際なんだけれど、そうじゃなくても、実際に世界を相手に、まさに学習机から世界へ。そしてその逆も、これが、おそらく、うちの国際情報学部ですね、最大の特徴だと思います。

うちの学部というかゼミの話ばかりしちゃいましたけれど、この4年間で非常に不幸なことではあったんですけど、2期、3期の人たちは学校に来たか来ないかわからないような、そういうコロナの恐ろしい災禍がありましたけれど、逆にこの災い転じて福となすで、うちの学部が目指したことがあつという間にできちゃったわけですよ。各自宅で、webで参加できる。これって、普通だったら何年もかけないとなかなかできないわけですが、あつという間にできた。まさに天の利です。そして、地の利は都心に学部ができたってことですよ。天の利、地の利を生かした次のステップについては後ほど述べます。

司会 ありがとうございます。それでは次は飯尾先生です。

飯尾 最近だと、やっぱり学際的な仕事をしるとよく言われるので、そこはiTLが時流に乗っているというか、学内共同研究で、去年までかな、法学部の工藤先生たちとやっていたやつも岩隈先生とか松崎先生とか加わっていただいて、松崎先生はITの立場ですけど、岩隈先生は法律のご専門の立場で加わっていただいて。そうすると、法律の分野にITの人間が入っているので、とりあえず学際研究だと認めてもらえるんです。もちろん、他の先生方も入って、学内共同研究やっていたわけですけど、極端な言い方すると、iTLの中だけで学際性が完結してしまうので、すごくやりやすかったなどは、その時には感じましたね。

実績ですね。うちのゼミに関していえば、対外的な発表はどんどんやらせていて、というところが実績としてはあったかなと思っていて、特に今年に至っては、すでに国際会議で2件発表があつて、たまたまどちらもポルトガルだったんですが、4年生が国際会議で堂々と発表ができたというのは、今までにない、まさに国際情報学部、面目躍如って感じかなという印象を持っています。

うちのゼミの話だけにしても仕様がなくて、学部全体、iTL全体に目を向けてもですね、去年も角田先生、斎藤先生のところも国際会議で発表しましたというニュースが流れていましたし、すごく外向き、やっぱりいろいろな研究会とか、学内の研究会で発表するのも重要なんですけども、国際情報学部である以上、国際会議で、学部生が国際会議で堂々と発表できるって、なかなかほかの大学でもあまりないので、そういう実績がちゃんと積んでいるというのは、国際情報学部の国際は、本当に国際なの？みたいな言われ方をすることもありますが、でも、今申し上げたような実績がしっかりありますんで、国際情報学部を名のってもいいんじゃないのというふうに感じています。それが、私が今、感じている、実績が一番大きいところなんじゃないかなというところですね。あとは、地の利の面もありますけれど、共同研究なんか盛んにやられている先生方もいらっしゃいますし、学生の企業の研修なんかにも参加してなんともありますし、うちでもやっていますけど他の先生のところでもやっているので、それもうちらならではという感じがしますね。

あと、改善点でしたっけ。改善点は、これとって今すぐにですね、ここは直さなければいけないというのは、ぱつと思いつかないんですが、やはり、学生はサークル活動みたいなのが、徐々にですね、最近増えてきて、いろいろとこう皆、学生がつるんで活動するようになってきたのが見えてきたなというのを感じてはいるのですが、一方で、やはり単独で、他の学部とも離れている、しかも定員数が少ない学部と

ということで、そこがですね、もっと活性化すれば、よりキャンパスライフというんですかね、学生生活も充実するでしょうし、その辺でもう少し交流しなければいけないかなというふうには思っています。

司会 それでは、平野先生よろしくお願いたします。

平野 私からは4点。今回のお題が「特色と実績」ですよね、4点お話をしたいと思います。

まず、一番目はですね、1年4ヶ月でこの学部を創ったというのは、実は教員だけでは絶対不可能でした。我が学部の特色は、職員の方々がとても優秀。1年4ヶ月で創れて上から言われたので、当然それなりの戦闘員をもらえないと戦えませんから、とても優秀な職員の方をいただいて、実際1年4ヶ月で創って、非常に、学生の皆さんの声を聞いて、がんばってくれています。ほかの学部も優秀な職員さんがいますけれど、ここは超優秀です。私はよく映画の話をするんですけど、『フューリー』[Sony Pictures, 2014年]という第二次世界大戦時代のヨーロッパ戦線を描いた戦争映画があって、ブラッド・ピットという人が演じる主人公がシャーマン戦車 Easy Eight 型の隊長になって僅か5人の戦車兵だけで300人の「Waffen SS ヴァッフフェン・エスエス」, すなわち「武装親衛隊」の優秀なドイツ軍精鋭の進撃を食い止めるという物語、最後は討ち死にしちゃうというプロットですけど、うちの職員はそのくらい優秀で、討ち死は幸いしていませんけど(笑)、それが一点目の特色の指摘です。

2番目の特色です。学生さんの進取の気性がすごい。最近学部内で合同発表会がありますよね、1年生の諸君もあったし、3年生もあって、今度4年生が、来週?今週ありますよね。今まで1年、3年、みんな多くの人が生成 AI。1年生はまだ著作権法を履修していないはずなのに、同法30条の4とか言って、自分で勉強したって言う。もうiTLLで学ぶことないじゃんというくらいすごく進取の気性が強い。今、社会を変えるような、ああいう生成 AI の技術に対して、自分で勉強して立派な発表ができるということは、すごい資質があると思います。これが2点目の特色。

3点目の特色は、この学部の特徴の実学というのが、先ほど岡嶋先生が実務家のゲストスピーカーですごい人々を呼んでくださったりとかは、ほかの学部ではこんなにたくさんはないんです。場所が近いというのがあるんですけど、iTLLは教員の皆さんがすごい人脈を使って、それを実務側の人たちが嫌がらないで受けてくれるんですね。学生さんもそうした機会をとらまえて、就活の相談なんかもどんどんそういうゲストスピーカーにしている。それと一つには、先生方も実は実務経験者が非常に多いということもありますし、あとは研究発表の機会が多いというのも、ほかの学部にはこんなにはないですね。それは研究発表というのは一つの学問分野というよりも、やはり実学的な社会問題に対して、解決策を提案するという方向に皆さん非常によく取り組まれているので、その実学という姿勢を学生さんも身に着けていただいているんだと、これが3点目の特色です。

最後4つ目。先ほどちょっと言いました、就職の結果を見ると、情報系の産業界への就職がとても多い。これ、グラフで見るとわかるんですが、私は立場上、週に1回、他の学部長や学長と意見交換する会である「学部長会議+学長学部長懇談会」に出ているんですけど、そうすると就活でどうなったのか、どんな分野に皆さん就職しているのかがグラフになって提示されるんですね、今回の3月の卒業生の結果も。そうすると大体まんべんなくいろんな業界に行っているんですが、我が学部だけ情報系に、すごい部分が情報系に就職をされている、これは我々のビジネスモデルというか教育モデルがちゃんと理解されていることだと思います。プラス、情報系でないところに行かれても、この情報という分野はどこでも必要なんですよ、今はね。たとえば、よく言います企業の広報、例えば、炎上したような場合、今、問題になっていますけれど、そうすると広報をどうやるのか、マスメディア対応だけではだめです、SNS対応をやらな

きやいけない。こういうことができる素養をも我が学部では学んでいただいて、多様なところにも行っていただいている。これも私はとっても嬉しいです。以上のような4つの特色があると思います。ご清聴ありがとうございました。

司会 平野先生、ありがとうございました。ITと法律を同時に学べるというこのiTTLでございますが、先ほど平野先生がおっしゃったように、実学の部分で秀でている部分もありますけれども、では実際に、学生の方から見て、iTTLの印象というのは実際にどうなのかということを取材してみました。

ここで、学生側からの発表を行いたいと思います。担当してくれるのは、瀧澤さんと宮崎さんです。よろしく願いいたします。

瀧澤 最初にiTTLでの学びについてご紹介いたします。このプレゼンテーションは、7月2日に行われた基礎演習の発表会でのプレゼン内容を短くまとめたものであります。最初にVTR1をご覧ください。

(VTR1「iTTLでの学び」：省略)

今回、何故、一般楽曲を使用して上映ができたのでしょうか。著作権法第38条にこうあります。「既に公表された著作物は、営利を目的とせず、且つ、聴衆又は観衆から料金を受けない場合には、上演、演奏、上映、口述することが許される」。この条文から、今回一般楽曲を使用した映像を上映することができました。実はこのアドバイスは、石井先生と岩隈先生からいただきました。この学部には、IT、メディア、コミュニケーションの専門の先生と法律学の専門の先生が一緒にいらっしゃいます。これがiTTLの大きな特徴であり、情報社会について学ぶ上で大きな強みになっていることを改めて実感いたしました。

(VTR2「学生の声」：省略)

宮崎 VTR2「学生の声」の内容は、テキストマイニングという手法を用いて、学部生の声を抽出したという形になっております。一応リアルな学生の声と受け止めていただければ有難いと思います。良い点では、iTTLでは、情報と法律が同時に学べるという特色があると皆強く感じている。駅に近い、立地・アクセスが良い、キャンパスが新しくきれいなどがあります。けれども、一方で、食堂が欲しい、売店が閉まるのがはやい、エレベーターが閉まるのがはやいなどのような声もあるということが、このデータから分かります。

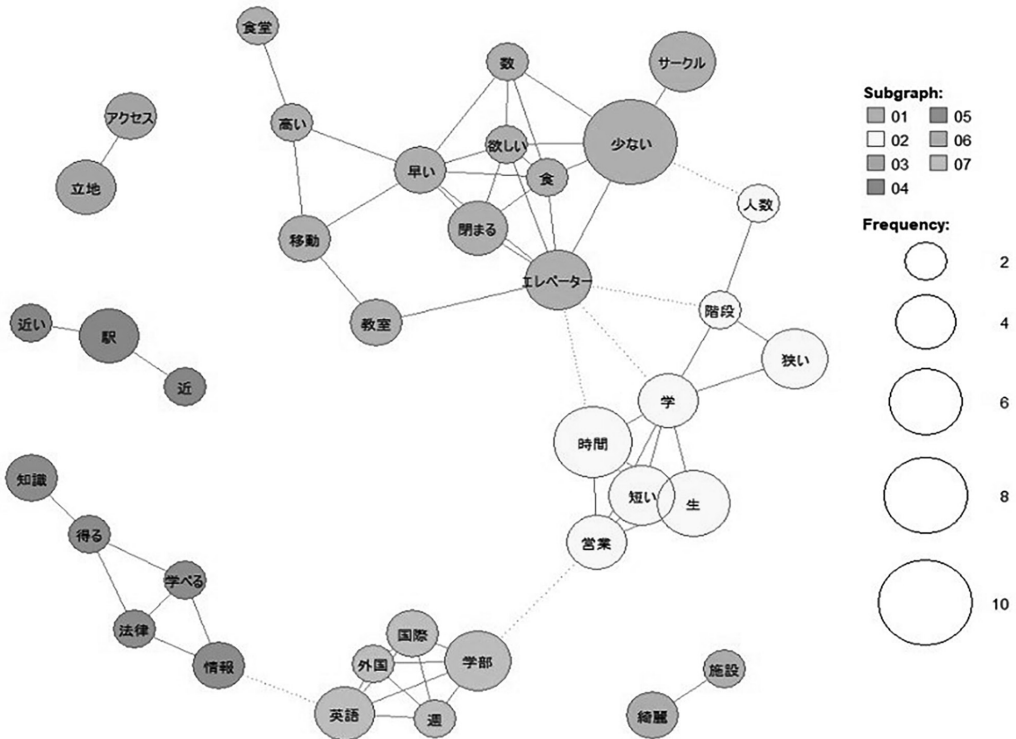


図1 「iTL生の声」に関するテキストマイニング (KHcorder, 共起ネットワーク, N=144)

司会 それでは、iTLの強みをさらに伸ばしていくにはどうしたらよいか、そして課題をどう解決していくのかについて語っていただきましょう。話題3のタイトルは「iTLのこれから、夢」です。まず、飯尾先生の録画からご覧ください。

飯尾 まず、今年大学院ができたのは、すごく一つの大きなステップだと思っています。修士課程だけですけどね。大学院ができて、大学院の授業をやってますから、20人の1期生半分がこの学部から上がった皆さん、そして残りの半分の10人が社会人で、働きながら参加されている皆さん、ということで、すごくバランスがいいというか、若いメンバーとある程度ベテランとですね、先生とが、和気藹々という意見交換しながら学んでいく姿勢というのは、今までにはない経験ですね。私があまり経験してこなかった大学院での学びという意味で、すごくいい感じだなと。学部1期生も素晴らしい人いましたんで、1期生はすばらしいというジンクスというかそういうのがあるのかもしれませんが、まずはそれをですね、学部もそうですし、大学院もそうですが、1期生はよかったけどねと言われないように、1期生から2期生、3期生と、今、学部の方は5期生までいますけれど、そういう続いて入ってくる皆さんで維持するっていうか、ますますかなというのは今考えています。

あとそういう意味で言いますと、大学院の後期課程ですよ。いろいろな事情で、単独の課程よりは難しいというのは十分承知している一方で、せっかくですね、法学部が茗荷谷にきましたし、理工学部が後楽園にありますし、都心3学部連合でやっていますから、大学院の後期課程が、大学の事情が厳しいというのは、うちだけでなく、お互い、理工も法学部もそれぞれ同じような事情を抱えている感じですから、

大学院の教育課程の再構築は是非とも早めに実現して、研究者を輩出したいという望みがあるというわけでもないんですけども、やはり教育課程でしっかり研究して、また社会に出て行かれば、また社会の方であれば社会人博士として活躍していくというような、そうした道をですね、切り拓いていきたい。これが今、一番の野望ですかね。

司会 では、続きまして岡嶋先生よろしくお願いたします。

岡嶋 はい、よろしくお願いたします。お話の機会をありがとうございます。改善点と夢ですね。改善したいことは、これまでもいろんな先生が言及されていて、僕自身も思うところあるんですが、そうですね、情報の授業はもっとチャレンジしたいです。これご覧いただいている方、僕のことをただのアニメ好きとかゲーム好きと思っていらっしゃるでしょうけれど、僕は本職は、ネットワーク屋なんです。コンピュータのネットワークを勉強したり研究したりするのが専門なんです。ネットワーク屋の立場で言うと、やっぱり、なんていうんでしょうね、一度ネットワークとかコンピューターを壊しちゃうような使い方をするのって、勉強していく中ですごく大事なことだと思うんです。ハッカーってやつですよ。ハックアンドスラッシュのハックです。切り刻んで中身を見る。その過程で一回壊しちゃう、くらいのことはしないと、なかなか詳しくはなれないと思うんです。そういう勉強の仕方って必要だと考えていたので、5階の502ってワークステーションルームあるじゃないですか、あそこはそういう使い方ができるようにして欲しいんですって、学部を作るときに要望していたんですけども、でも中央大学はすごくかたい。ステディな大学ですからね、ルールを踏み越えるような使い方はなかなか許していただけなくて、がっちりしたセキュリティポリシーが適用されています。ひょっとしたらそれを踏み越えて壊せてことなのかもしれないですけど、僕は勤め人なので、やっぱりクビになるの怖いですから、あんまりルールに抵触するような使い方ができないでいます。そうすると、お行儀のよい使い方っていうか、みんなが思うような使い方の枠内でしかコンピューターがいじれず、それ以上のところはなかなか勉強できない。

学生さんが、BYODマシンとか持参してくれる学部なので、それだったらいいですよって言われたこともあるんです。502室に通信ケーブルが出ているのを見たことある方いると思うんですけど、そこに自分のコンピューターをつないで、自己責任でやるならめっちゃくちゃに使っていいですよってことになってはいるのですが、怖いじゃないですか。だって学生さんの自前のコンピューターですからね。滅茶苦茶いじり倒そうぜってやり方は、それこそできないと思うんです。いじり尽くした結果、レポートが書けなくなったりとか、僕も困ってしまうので、未だいい解決策を見出せずにいるのですが、ここは改善する余地があると考えています。「大学のコンピューターで、隔離環境だからこそ、思い通りにいろんなことが試せて、壊しちゃったけどそれが笑い話ですんだ、詳しくなれてよかった」そんな環境を提供したいと思っています。

それから、もっと進化させていきたい、継続して頑張っていきたい点としては、さっき資格の話をしていただきましたけれども、ほんとに皆さん実績を出していただけていると思うんです。例えば、文系学部というくくりの中で考えたら、異常なくらい資格を取ってくださっていると思いますし、それを踏み台に就職なんか（まあ1期生、二期生のご祝儀相場というのものもあるかもしれませんが）みんないろんないいところに就職できていると思うんです。例えば、GAFAって入るの大変なんですよ。大学院出ていないとなかなか入れないです。でも、今年あたりから、ぼつぼつ受かり始めている人がいて、世界に冠たるトップカンパニーに入れるような人たちも出てきた。これが1期生、二期生の単発の勢いで終わらずに、継続していけるように頑張りたいと思っています。やっぱり大学の学部って信用が大事だと思うんですよ。あそこの学生とれば安心だよ、っていう信用を少しずつ積み上げていって、いろんな企業からあそこの卒業生だっ

たら安心して採ることができる、そう評価されることがすごく大事です。これから学部運営が連綿と続いていく中で、だんだん惰性で転がっていく部分が出てきちゃうかもしれませんが、その都度、最初の気持ちを出して、国際情報学部の理念に基づいた教育ができればと考えています。今日はありがとうございました。

司会 岡嶋先生ありがとうございました。それでは続いて、保坂先生お願いいたします。

保坂 はい、実は私ですね、現状に非常に不満を持っております。どうしてかって言うのですね、iTTLの知名度が低い。それから、思ったほど、これは学部長も気にしておられますけれど、偏差値が上がっていない。これはいろいろテクニックがあるらしいんですけどね。僕は、iTTLが育てようとしている人材はですね、今、国家プロジェクトなんですよ、というか、国家が欲しがっている人材なんです。僕は別に右翼じゃないですから、国家萬歳とは言わないんですけど、この国の、今、一億二千万ですけど、この人口をですね、この小さな国で養っていくためには、高い付加価値を持つ人間をどんどん出していきたくって国が言っているのに、その国の、一歩も二歩も先を行っちゃったからかもしれませんけどね、それを全く世幹がそして学生が理解していない。「しっかりしろ！」って言いたくなるんです。

今回これを企画したのもそういうのがあって、iTTLってなんなんだっていうのをですね、身内、中から発信して行きたい。できれば高校生たちに。親御さんにもですね、見てもらいたい。もちろんカリキュラムもまだまだこれからですね、仕上げていかなければいけない。時代は変わっていますからね。まず、これだけの人材を輩出できるという理念を持って、技術も持っている学部がですね、どうしてこう低迷しているんだと。中央大学が石橋を叩いて割ってしまうような、そういう人たちに人気があるから、つまり、そういう人たちしか来ないっていうような、そういうレベルではないと思うんですよ。僕は、石橋なんか渡らなくて飛び越えちゃえばいいんですよ、もう。そういうですね、iTTLなんて、世界に飛び出そうとこんなに思っているのに、偏差値が飛び出さないじゃ、困るでしょう。皆さん、来ていただいたからありがたいんですけども、これからもっともっと優秀な人材をですね、やはり我々は確保したいですね。入ってきていただきたい。そのためには、内容がいいってだけじゃ、うそぶいていたんじゃダメなんだなと。やっぱり、良いものを良いように皆さんに発信していく、そしてそれを認めてもらう。この点に関してやっぱり、ある意味中央大学ですね、突破口にもなるわけですし、もっと言えば国家の突破口にもなる。そういう人材を育てる力もあるし、意欲もあるわけですよ。あとは世間が、生徒が乗ってくるかどうかです。その点で、生徒の皆さんにも覚悟が欲しいな。ただの反省は自虐なんです。反省をして、次のステップを開拓していく、これは創造です。創造して、そしてそれを作っていくだけじゃあ、これは哲学的で終わっちゃうんですけど、さらにそれを実践する、岡嶋先生とかそうおっしゃっていますけど、企業の人とタイアップするというのは、まさに実践するノウハウをここで身に付けること。だから0から100まで全部そろっているんですよ。ある意味、それを使えないのは、先生もちょっと工夫不足かもしれませんが、生徒もしっかりしてほしい。

昼食や憩いの場がないのは、確かにね、これは育ち盛りの諸君にとっては非常にマイナスだと思いますのでね、そこらへんはちょっと学部長に何とかしてキッチンカーとかやってもらい、最初はそういう計画もあったんです、これ徐々にやります。ただし、それはある意味付け加えるものであって、諸君の、あるいは国家の将来のためには、皆さんが今、ひもじくても学ぶという覚悟が大切です。どうですか。学ぶってのは、知識だって学ばなくてはいっぱいにならないんです。食事でおなか一杯になっても知識がカラッポではダメですよネ。腹の方は五分目くらいでいいんです。それより知識を、頭脳をどんどん満たしてく

ださい。我々もそれに応えられるように努力したいと思います。ちょっと力入りましたけれど、以上です。

司会 保坂先生、熱い思いをありがとうございました。理解したうえで、学びを続けていきたいと思えます。それでは、最後に平野先生よろしく願いいたします。

平野 ちょっと今の保坂先生の付け足しと、広報の予算が実はないので、優秀な皆さん、是非とも母校に夏休みとか帰って、食堂がないという話はさておいて(笑)、とても素晴らしい先生がいて映像を作りましたよとかって、ま、このシンポジウム用の映像の宣伝効果はちょっとアレですけどねwww、是非とも宣伝をしていただきたい。僕は、iTTLを知っていただければ、来たいという絶対的な数の受験生がいると思うんですよ。だけど、席は150席しかないんで、あつという間に埋まると思いますよ。だから是非とも皆さん、宣伝はね、していただきたい、お願いします。

では、まず、答えの一番の学食。ここからオフ・ザ・レコードですよ、本音を言います。私、学食の設置を大分要求いたしました。... [オフレコなので削除] ... キッチンカー、考えました。しかし停める場所がない。で、いろんな業者にね、実は「シーズショップ」についても、本当は、初めは僕はスタバに来てほしかった。でもそれは無理。商売が、夏休み、みんないなくなるでしょ、だから経営が成り立たないんですよ。だというんで、プロントにも検討してもらったんだけど、でもプロントにも逃げられちゃった。そういうちょっと苦しい状況がありますが、引き続き僕は要求はしていきたいと思えます。

他にですね、学費。これは実は我々は理工学部よりも安く、普通の文系学部よりもちょっと高いという、ここの性格ですよ、ちょっと理系が入っているんでコストがかかりますよ。だけど、理工学部ほどかかりませんという、そういう意味では妥当な学費に一応なっていますということ。

顔認証。僕、言いたいのは、僕の顔が拒絶されるんですけどって、なかなか覚えてくれない(笑)。ここからオフレコ。僕は要求していなかったんだけど、... [オフレコなので削除] ... 精度は一応、日本一のNECの顔認証システムが入っていますが、私のことも認証してくれない点は何とかして欲しいwww。勉強しかない。これはとってもいいことですよ。

はい次、第二外国語がない。これはまたコストの話なんです。第二外国語って、実際に開講するとですね、最後までやり続ける人が少ない、その割に新たな教員を、外の人を雇わなきゃいけなかったりして、その割に、やってみるとわかるんですけど、最後まで続く学生さんがいないんですよ。だから、我々、もう割り切って、これは、第二外国語の科目は設けられないけれど、それは本当にやりたい人は外で勉強するはずであると、その代りほかの科目を充実させていこうというコンセプトでカリキュラムを作ったので、そこはご理解をいただきたいということです。

エレベーターが少ない。これも初めに僕、要求しました、この学部を創る時に。しかしこの狭い敷地ではもうこれ以上増やせない、物理的に増やせない。なのでそれは仕方がない、ということです。その代り、余談の話ですけど、予算をどこに使うか検討した際に、僕、トイレをすごく増やしてもらいました。今も増設工事を夏休みや春休みの期間にやっているのかな。僕が期待したのは、これ、もともとオフィスビルなんで、トイレとか少ないんですよ、人材会社とかが入っていたビルを中大が買ったので、学生が使えるようにトイレを増設してもらうことにしました。すごく重要ですよ、トイレって。で、きれいな方がいいでしょ。だから、そこには優先的にお金をかけて、一応いいものになったかな。で、エレベーターだけは仕方がない。これだけは我慢するしかない。お願いしたいのは、若い諸君は特に近い階は階段を使ってくださいということ。体のためにもいいですよということで。閉まるのが速い。僕もそう思います、ただ閉まるのが遅いと、きっとエレベーターを呼んでもくるまでの時間をもっと沢山かかりますよね、きっ

とそういうことかなと思います。でも、じゃあ、遅くなるのがいいのか、閉まるのが遅い方がいいのか、それは学生の皆さんで議論した上で、それで要望を出していただければ当然我々が庶務課にお願いしたりはできると思うので、それは検討いただければと思います。全部答えたかな。全部答えていますね、ということでございます。引き続き、学生諸君の努力を、保坂先生からの刺激も入れて頑張ってください。それから、先ほどからとても低姿勢で言っていたいただいて本当にありがたい。昔の我々の上の世代だと学生紛争と言って、とんでもない、要求！とか言って罵倒されるような先生方がいたみたいなんですけど、まあ、素晴らしく社会性が高いということで、将来がすごい期待できるなということで、ちょっと長くなりましたね、以上でございます。ご清聴ありがとうございました。

司会 ありがとうございました。今、お話し伺いまして私たちも全然知らなかったことばかりでございまして、腑に落ちる点もたくさんありまして、それを肝に命じ、これから極めていきたいなというふうに思っております。

ここまで、話題1, 2, 3というふうに進めて参りましたけれども、ここから質疑応答に移りたいと思います。Webexで参加されている方も含めまして、何かご質問等ございましたら、よろしくお願いたします。

江上 3年の江上です。今日はシンポジウムありがとうございました。ここには、学生が僕しかないのので、Webexで見ている学生もこの後何かしゃべってくればなと思うんですけど、サークルの話が飯尾先生から出ていたんですけど、ほかの先生方は、なにかサークル活動についてこうあってほしいなとか、こういうこと考えているんですけどみたいなことがあれば、教えていただければと思います。

保坂 うちの学校の構造上ですね、ゼミが先生単位なんですよ。各学年で独立していて上下の関係がちょっと薄い。ふつうゼミだと3年4年が一緒になってそして議論するんですが、3年4年とになっていて先輩後輩の結びつきがちょっと弱い。それをですね、補うためにいろいろなサークルをですね、もっと、利用していただいて、そして作ってもらって、僕も地域起しサークルというのを作ったはずなんですけど、今少し沈滞しています。運営を間違ったかなと思っているんですけど、いづれにしても1年から4年までが一つの目標で、サークルで、意思疎通ができるというのはサークルの特徴ですし、特にうちには必要ですので、どんどん学生がリーダーシップをとってやってほしい、作ってほしい。申請書が必要なら、僕がサインしちゃいますから、もっともっと学生に積極的にサークルを作ってほしいと思っています。平野先生、いいですよ。

司会 他に何かありましたら。

角田 本日は学生の皆さんの声をうかがうことができて、とても有意義でした。ただ、その一方で、学術的な点に対して学生さんの関心があまり高くないようでしたので、少々不安も感じました。たとえば「もっとこういうことを教えてほしかった」のような発言が欲しい気もしましたが、そうなるように我々教員も教育の中で努力したいと思いました。それは学生さんの基礎学力など潜在的な知力が高いと思うからです。先ほど飯尾先生もおっしゃっていただきましたが、本学部の学生の中には海外の国際会議で単に発表したということに留まらず、その論文が世界レベルの審査にパスした結果、発表を認められたケースもあるからです。このようなレベルは大学院レベルともいえます。そういう学部なのですが、やはり普段の意識や関心がそういう学術的観点よりもエレベーター問題のようなことに集まってしまうがちなので、少々残念

な気が致しました。もっとも、楽観的に考えますと、これは学びの本質的問題には学生さんがあまり不満を感じていないということの現れかも知れません。ただ、それでも、もっと学修に本質的な、「興味を持ったことについて、より深く学びたい」とか、「情報の学習の中で法やグローバル教養とのつながりを知りたい」などの話がありますと、少なくとも私にとってはさらに励みにもなると思いました。後者のような要望でしたら、元々教員同志でコラボ授業をすることもありますので、さらにそういう授業を増やすという方向性で改善に向かえるかも知れません。ただ、その場合もやはり学生さんの方からもそういった要望が出てくるようになると思うのかな、と思います。今までは教員側が、これがいい、あれがいい、と取り組んできたわけですが、1年生でも本日進行して下さっているような優秀な学生さんが沢山いるのですから、逆に教員が気付いていないような改善点や要望も学生さん側が出してくださる潜在的な力があるように感じます。その能力を活かせる場を今回に限らず用意したいとも思いました。ただ、学生さんたちも、教員は結構気楽に話せる人たちが多くですから、一見敷居が高そうかもしれないですが、基本的にどなたでも大丈夫だと思いますので、基礎演習の担当教員などをベースにどんどんお話をさせて頂ければ、と思います。学生さんと教員の距離が近いのは少人数学部の利点でもありますので活かして欲しいです。近年の学生さんは社会性もしっかりしていて素晴らしいので、問題なく普通にコミュニケーションをとって頂けると思います。そうして、もっと仲良く、和気あいあいとできるようになったら嬉しいです。申し訳ございません、思いつくままの感想になってしまいました。

宮崎(司会) さきほどの改善すべき点に関するコメントで、カリキュラムの内容についてあまり文句がなかったのは、担当されている先生方がやっぱりすごいというのは、我々入ってまだ3か月ちょっとですけど、感じているところではあります。石井先生であるとか岡嶋先生をはじめ、必修の授業で担当されている先生方が本当にすごい先生だなというのは感じていますので、授業の内容に関してはあんまり不満が出てこないのかなと思います。ありがとうございます。

松野 これを企画しました松野です。このシンポジウムというのは、IT分野と法学分野がバラバラで走って行ってしまうのを止めて、2分野を融合させて、新しい視点を探索しましょうというのが、狙いなのです。いつもは個別に研究しているが、たまにみんなで集まっているいろいろ話し合ってみようよというのが、このシンポジウムを最初に発想した趣旨でございます。今回、1年生が見つけた改善点というと、どちらかというと施設面ばかりです。まだ深い学問的内容、講義システム、カリキュラムの設計などの方については、意見がないんです。たぶんみんなガイドブックを少し見ただけで本当の中身はよくわかっていないんじゃないかなという気がします。これから、さらに学生が成長していくに連れ、内容に関するアイデア、意見、改善案などもでてくるかと思えます。そう期待したいと思えます。外部にも、高校生にも、この学部の内容について、もっとわかりやすく広報していくことが必要であると思えます。

宮崎(司会) 今、松野先生が、広報の部分に力を入れるようにとおっしゃっていたんで。私は今、塾のほうでバイトをしているので、高校生にもこの学部いいんだよというのを自分が広めていけばいいのかなと思いますので、貢献していきたいと思えます。

それではこれで質疑の時間を終わらせていただきます。あ、失礼いたしました。

小島 聞こえますか～？小島です。本当に面白いシンポジウムありがとうございました。今回のお話を聞いて、iTLの意義を発信していけるような、何かしら活動をしていこうかなと考えていたんですけど、カ

リキュラムの面で、1年生で前期を過ごした身としては、選択できる余地が少ないのがちょっと気になっていたのですが、そこだけはちょっと改善を考えていただければなと思いました。本当にここいい学部で、いつか中央大学の看板学部を法学部でなく国際情報学部であるというふうに認識させるように頑張っていきたいと思います。その体系のところだけ見直していただければなと思います。

平野 はい、ではメの言葉と今の質問への答えです。1年生の選択の余地が少ないというのは、これは意図的にそうなっているので、まず、その趣旨を理解していただこうと思います。私、たまにガイダンス説明会で受験生とご父母向けにこの点も説明しています。1年生は「ブートキャンプ」ですが、あまりにも古い言葉で若い人は知らない。はい、軍隊に入るとですね、初めに基礎訓練というのをやるんですね、それをアメリカではブートキャンプとって、その軍曹さんが独立して、そのブートキャンプのエクササイズビデオを作ったらとても売れましたというのが、ご両親に聞くとわかると思います。すなわち、しっかりとした基礎力がないと、やはり浅はかになっちゃうんですね。ですからその基礎力というのは何かというと、ITの世界では例えば端末があってハードウェア、ソフトウェアがあって、ネットワークがあってという基本構造が分かってはじめてその上のいろいろな問題が、原因だとか解決策だとか、問題の解決策ってITでやることと、法律でやること、その他の第三番目の手段というのがあるんですけど、これが皆さんには卒業するときにはしっかりできるような能力を、そのためには、端末があり、ハードウェア、ソフトウェア、ネットワークがありというのをしっかり理解して、法律も同じなんですよ、ね、「法学概論」という入門の科目があって、「憲・民・刑」という基本法があって、そこに皆さんの場合は「情報法」という基幹科目があって、二年生になると「AI・ロボット法」という新領域の法律学も勉強してもらって、そこから選択科目に発展していく。だから1年生の場合は、申し訳ない、基本はみんなやっていたかかないとならないということで、基本ってあまり面白くない部分があるんですけど、要するに軍隊で言えば「匍匐^{ほふく}前進」をやるんです。ただ、実践になったら、匍匐前進というのは現代の戦争ではあまりないんだけど、基礎力がないといざという時に困ってしまうので、そこはしっかり勉強してほしいという説明でございます。

最後に、ではメの部分。今日は、本当に松野先生、松野ゼミの皆さん、とても良い企画をありがとうございました。私も堪能いたしました。つまり、構造的に過去、現在、未来のすべてを扱っているわけですよ、ね。経緯、過去があって、現在の現状があって、その問題に対して将来こうありたいなという、すべてを網羅できた。松野先生からいただいたように、学際的な学部って、やっぱり専門分野別に遠心力がはたらいって、つついばらばらになりがちなんです、経験上。それをどうやってつなぎとめて、みんなで協力しあう体制を続けるのか、それには不断の努力が必要で、今回のようなシンポジウムを通じて、専門の違う人の意見を聞いて、学びあって、意見を出していくという、これゼミみたいなものですね、これとっても重要な機会です。で、それを皆さんも、我々教員がやるのを見ていただいて学んでいただいて、他の分野に関心を持っていただくということです。そうしないとさっき言ったように、社会問題を解決できない。そういうところを今後も引き続き、こういう機会を通じてやっていきたいなと思います。それから、先ほども言いましたが、こういうようなことを自由にやれる背景を作っているのが、優秀な職員の皆さんです。この場を借りて、学生の皆さんも、是非とも職員の皆さんに拍手していただきたいなということですね。ありがとうございます。ということで、iTL、永遠なれということで、私のメの言葉としたいと思います。皆さん、ありがとうございます。

司会 平野先生ありがとうございました。以上を持ちまして、「国際情報学部 第二回シンポジウム iTL

のこれまでとこれから」を終了いたします。皆様、本当にお疲れさまでした。

おわりに

ご覧いただきましたように、国際情報学部（iTL）は、奇跡的な展開で創られた学部であります。そして、最先端の領域を複合的に扱っている学部であります。IT、AIなどの最新技術によって、社会基盤は大きく変わっています。その中で、私たちはどうルールを作って、どんな社会を創っていくのか、そして安全で平和な社会を創るにはどうしたらよいか、などをテーマに、教員と学生が自由闊達に議論しながら学んでいるのが、国際情報学部です。

新しい技術の発展が生み出した諸問題について、学生と教員がともに、意見、アイデアなどを出し合っ、みんなで解決し活用していこうじゃないかという気風が学部内にはみなぎっています。このシンポジウムの内容も、この学部の雰囲気をお話しているかと思えます。

奇跡的なめぐりあわせでできた最先端の学部であること、「国際」は、学生が海外の大学生とコミュニケーションをとり、国際学会の舞台でもどんどん発表して活躍するという意味であること、学生と教員との壁が低く、ともにアイデアを出し合っ、問題解決をしていこうという学部であること、などをぜひご理解いただけたらと思います。（プロデューサー・松野良一）